

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
C-142	A-141	21-403
独立行政法人国立病院機構さいがた医療センター 佐久間寛之 独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター 松下幸生		
題名（原題／訳）		
Vulnerability for Alcohol Use Disorder and Rate of Alcohol Consumption アルコール使用障害の脆弱性とアルコール消費率		
執筆者		
Gowin JL, Sloan ME, Stangl BL, Vatsalya V, Ramchandani VA		
掲載誌		
Am J Psychiatry. 2017 Nov 1;174(11):1094-1101. doi:10.1176/appi.ajp.2017.16101180. Epub 2017 Aug 4.		
キーワード		PMID
アルコール乱用、家族歴、衝動性、大量飲酒、性差		28774194
要 旨		
<p>目的：アルコール使用障害の危険因子はいくつか特定されているが、これらの因子を多く持っていたとしても、発症には至るとは限らない。リスクを持つ人と健康対照群との、発症前のがちがい明らかにすることで、より高いリスクを持つ人々を特定できる。血中アルコール濃度が80mg%以上と定義される大量飲酒は、法的にも健康的にも悪い結果をもたらすリスクがあり、発症の初期マーカーとなる可能性がある。著者らは厳密にコントロールされた研究セッティングで、アルコール依存症の家族歴、性差（男性）、衝動性、アルコールに対する反応の低さなどのアルコール使用障害の危険因子が、個々のアルコール消費セッションにおける大量飲酒レベルの割合を予測するという仮説を検証した。</p> <p>方法：この横断研究では若年の非依存症飲酒者 159 名を対象に、アルコールを静脈内に自己投与する実験セッションを行った。Cox 比例ハザードモデルを用いて、上記の危険因子が大量飲酒（80mg%以上）レベルの自己投与と関連するかどうかを調べた。</p> <p>結果：アルコール依存症の親族の割合が多いこと（ハザード比：1.04、95%CI：1.02～1.07）、男性であること（ハザード比：1.74、95%CI：1.03～2.93）、衝動性の高さ（ハザード比：1.17、95%CI：1.00～1.37）は、セッションを通して大量飲酒レベルの自己投与を行う率の高さと関連していた。3つの危険因子をすべて持つ参加者は、最も危険度の低いグループと比較して、セッションを通して大量飲酒レベルの自己投与を行う割合が最も高かった（ハザード比：5.27、95%CI：1.81-15.30）。</p> <p>結論：大量飲酒は、アルコール使用障害発症の早期指標となる可能性があり、臨床評価の一環として適切に評価すべきである。</p>		